

編集後記



森 樹男
(ラムダ作戦会議議長、弘前大学人文社会科学部教授)



山内 史子
(ラムダ作戦会議委員、紀行作家、編集後記編集担当)



奥平 理
(ラムダ作戦会議委員、北海道教育大学函館校准教授)



大西 達也
(ラムダ作戦会議アドバイザー、日本スポーツ振興センター理事)



中嶋 優翔
(北海道教育大学函館校)



松田 澪
(弘前大学人文社会科学部)

森 樹男 「ラムダの教科書」刊行にあたり、あらためてラムダ作戦会議について考えてみたいと思い、編集後記として座談会の場を設けました。まずは以前、会議に参加していただいた学生さんの感想を伺いたいと思いますが、率直なところいかがでしたか。

中嶋優翔 ラムダ委員の方々とご一緒したのは一度だけでしたが、それでも情熱のすごさに驚かされ、地域創生のためには強い想いと能力が必要だということを実感しました。

松田 澪 失敗を恐れることなく、あらたなことに取り組み続けてきた姿勢が印象に残っています。皆さん、何をモチベーションに動いているのだろうとも思いました。

大西達也 私もラムダ委員のエネルギーがどこから湧き上がってくるのか、不思議でならないのですよ。地域やそこに住む人たちのために何かしたい、地域の魅力を広めたい、あるいは、自分たちが楽しく暮らしたいといった強い想いが根底にあるのでしょうか。全国の地域づくりに関わってきた経験からも、ラムダ委員の発する熱量は突出しています。

奥平 理 津軽海峡の対岸、北海道側から見ると……ご存じのように北海道とひと言でいっても広いせいか、郷土のためになにかしら全体で協力してという意識は薄いのではないかと常々感じています。ですから、青森県の皆さんの郷土愛には圧倒されますね。青森出身のうちの学生もそうですが、故郷のことを愛してや

まないのが共通している。

森 ラムダの活動では、それぞれの委員が関わる県内各地や道南をとともに歩いたことで、一緒になにかに取り組もうという一体感やエネルギーが生まれたような気がします。

山内史子 失敗を恐れない姿勢を支えているのは、経験値ですかしら。失敗は成功へのプロセスだと知っているから、くじけることなく前に進める。モチベーションで言うと自分の場合、単純に面白いんですよ。個性あふれる委員の意見や、予測できない行動が。

森 会議中に踊ったり歌ったり、ということもありましたね。青森県の会議の中でもっともゆるいと言われていますが、出席すればいろいろな人と会えて情報交換ができるし、なにかしら計画が生まれて進めていこうと盛り上がる。実際、こんなことができるのかと思うご提案が結構あったものの、結果的にはその多くが実りを生んできました。事務局である青森県企画政策部交通政策課の方々も、一生懸命サポートしてくださっています。

奥平 会議はとにかく発見の連続で、自分自身のひらめきにもつながっていますね。青森は奥が深くて面白い、と思いながら毎回、参加しています。自由度が高く自主的なところが、ほかの会議とは大きく違う。終わった後の夜の部も、大いに盛り上がって楽しいし。

大西 確かに、ラムダの活動からは発見が多いですね。実際に私がそうですが、おそらくほかの委員の方々も、会議の場で新しいアイデアの種が得られたり、新しいことに挑戦するエネルギー、元気をもらえたりしているのでは。それが自分の仕事にも生きてくる。

山内 会議の場から離れて集ったり、新しい企画が生まれたりというケースも多々ありますね。委員同士のつながりが形式的ではなく、とても深いのだと思います。

大西 たとえば「瀬戸内DMO」のような広域連携の仕組みは全国にも見られますが、そのほとんどが協議会や会社のようにきちんとした形態の組織になっています。しかしながら、ラムダ作戦会議の場合は「ラムダの掟」だけで委員が集まり、動き、維持できている。地域創生の好例として研究に値するのではないで

しょうか。「津軽海峡はマンモスの時代から行き来していた、しょっぱい川」と三村申吾青森県知事が話されていましたが、海で地理的に分かれた今も、同じDNAで根っこの部分はつながっているのかもしれませんがね。

森 世界を見渡すと、海峡を挟んだ交流が生まれているところは多いですね。海峡というギャップは交流や物理学的な対流が起きやすく、その流れから新しいアイデアが生まれていくのかなという感じがしています。

山内 私たちはつい現代の感覚で人や物の流れを考えがちですが、昔は陸よりも海に行く方が効率的でしたし、お互いに向こう側が見えるという点において、海峡の距離間はとても興味深いものがありますね。

奥平 道南にとって、青森県は真ん前！海峡を渡ってみたいくなるのは、当たり前感覚だったと思います。今は道南に住んでいるけれどご先祖は青森県から来て、お墓は残っている、というお話もよく聞きます。海峡を越えても故郷への思いを断ち切らず、脈々と受け継ぎながら道南で暮らしている方たちはかなりの数にのぼるのではないのでしょうか。

森 アイヌの方が渡ってきた跡も県内各地に見られますし、太古の昔から海峡を挟んだ交流はごく自然にあったのでしょうか。そう考えると津軽海峡交流圏の中でのラムダ作戦会議の活動は必然なのかもしれませんが、今後に向けた課題があるとすればなんでしょう。

大西 実は、ある自治体の職員研修でラムダ作戦会議を事例研究に取り上げて評価してもらったところ、委員が活動を自分ごとと捉えて自ら実践している点が魅力的であり、新鮮であるといった意見や、地域独自のものを取り上げて活用する、オリジナリティについても評価が高かったですね。一方で、もっと積極的に情報発信すべきではないか、委員が固定化しているので次世代の人材確保が必要ではないか、というご指摘もありました。

山内 ラムダの自由度と、コロナ禍は相反する。発足当初はイベントなどを介して、学生さんを含む一般の方々を巻き込みながら進んでいたように、内部だけでという意識はないので、コロナ禍収束後はあらためて枝葉を広げていくことが今後の課題の一つですね。

大西 コロナ禍で一時は県をまたぐ移動が制限されたものの、一方でマイクロ

ツーリズムが提唱されたことで、ラムダの活動は完全に止まったわけではありませんでした。特に、全国で多くの地域がギブアップしていた時期に、いち早くリモートでイベントを開催した意義は大きかったですね。ラムダ委員は知恵を絞りながらチャレンジを重ねていたし、リモートであっても皆さんが活動にかなりの熱量を込められていたのを覚えています。

森 通常は会議があればそれに紐付いた予算がつき、行政のプログラムに沿った事業計画の中で動いていく流れになりますが、ラムダ作戦会議はそれがないし、考えたことは自分たちで実行して県がバックアップをする。自由に動けるのが魅力ですが、今後それをいかに維持していくのかも大きな課題になりそうですね。

松田 ラムダ作戦会議は10年近く続いているそうですが、そういう長期的な取組みはほかではあまり例がないと聞き、継続の難しさ、大切さを考える機会になりました。

中嶋 人口減少や少子化を考えると、一つの自治体だけではなく、青森県と道南のように離れていても近い感覚にある地域同士の連携を強化して盛り上げていくことが、現在の地方創生において重要な鍵の一つになってくるのではないかと考えています。

奥平 津軽海峡交流圏は昔も今も、お互いに「見える」存在です。見えるからこそ、相手先を見てみたい、知りたいといった好奇心が絶えず生まれ続けていると思います。でもお互いのテレビや新聞などの地域メディアは「都道府県の壁」で遮断されています。この「壁」を打破できるのは、もしかすると私たちラムダでの取組みなのかもしれません。

大西 ラムダ作戦会議は北海道新幹線の新函館北斗駅開業に向けて始まったため交通政策課が担当していますが、観光をはじめ地域の魅力を広く発信していくためには、役所内の枠組みを越える必要があるかもしれません。とにかく、いい意味でゆるく、無尽蔵のエネルギーを持つこの集まりを活用し続けていくことが青森県の未来のためになると確信しています。

森 ラムダ作戦会議は先が読めない、何が起きるかわからない。そういうワクワク感も魅力だと思っています。この先、どのようにラムダの物語が続くのか、楽しみですですね。